25　大豆の生産性向上

ZEN-NOH

〇水田を活用した転作大豆の単収増加に向け必要な5つのポイントに取組みましょう。

大豆栽培における５つのポイント

- Point1 排水対策を徹底しましょう。
- Point2 堆肥等の投入による土づくりを徹底しましょう。
- Point3 ブロックローテーション等の輪作を実施しましょう。
- Point4 適切な病害虫・雑草防除を行いましょう。
- Point5 中耕・培土などの管理作業を徹底するとともに、適期に収穫しましょう。

Point1 排水対策を徹底しましょう。

大豆は湿害に弱い作物です。排水不良圃場で湿害を受けると、発芽不良や生育不良が起こり、収量や品質に著しい悪影響を及ぼします。

排水対策として、弾丸暗渠の施工や排水溝（明渠）の設置、サブソイラ等を使用した心土破砕を実施しましょう。

弾丸暗渠

額縁明渠

Point2 堆肥等の投入による土づくりを徹底しましょう。

大豆は地力が大きく消耗する作物です。そのため堆肥・緑肥等の有機質資材を投入し、地力の維持に努めるとともに土壌の透水性・保水性を確保しましょう。また、土壌pHが低い圃場では、消石灰や炭カルなどのアルカリ資材を施用しましょう。

根粒菌が着生するまでの初期生育期間の窒素を確保するため、また収穫に伴う加里やリン酸の収奪を補うため、基肥もしっかり施用しましょう。

Point3 ブロックローテーション等の輪作を実施しましょう。

大豆は連作障害が発生しやすい作物です。連作は、地力を消耗させる上、土壌病害虫（ダイズシストセンチュウ・黒根腐病・茎疫病等）の発生を増加させます。

ブロックローテーション等の輪作を徹底することが基本ですが、やむを得ない場合でも、３年以上の連作を避け、有機物を施用するなどの対策を行いましょう。

Point4 適切な病害虫・雑草防除を行いましょう。

黒根腐病、茎疫病対策は薬剤防除だけでなく、輪作や有機物施用、営農排水対策などを併せて行いましょう。

病害虫防除は、播種前の種子消毒を徹底し、開花期以降に病害虫の発生に合わせて散布剤による防除を行いましょう。

雑草防除は、播種直後の土壌処理剤の使用を基本とし、雑草が多い場合は茎葉処理剤の体系防除を行いましょう。

帰化アサガオ類などの難防除雑草の体系防除例（2020年3月現在）

①大豆播種後出芽前：土壌処理剤を散布

②大豆本葉２葉期：全面茎葉処理剤（大豆バサグラン液剤※、アタックショット乳剤※など）を散布

※品種や気象条件などにより大豆に薬害を生じるため指導機関の指導の下で使用する。

③大豆本葉５葉期：非選択性茎葉処理剤（バスタ液剤など）の畦間・株間処理

Point5 中耕・培土などの管理作業を徹底するとともに、適期に収穫しましょう。

中耕・培土は雑草発生の抑制、土壌通気性の改善、排水性向上、倒伏防止等に有効です。開花期までに１～２回中耕・培土を行いましょう。

子実水分が高い状態で早く収穫すると、その後の脱穀・乾燥に影響し、汚粒やしわ粒などの品質低下の原因になります。また、収穫が遅すぎると、莢水分が低下して裂莢による減収や、降雨によってカビ等が発生し、品質低下を招きます。適期に適切な機械作業速度で収穫しましょう。